佐々木照央

『エヴゲーニイ・オネーギン』世界語訳に学ぶ

（Aleksandr Puŝkin, *Eŭgeno Onegin*. Tradukis el la rusa lingvo Valentin Melnikov. Kaliningrado, Sezonoj, 2005. 256 pp）.

『オネーギン』を外国語に翻訳？　それは不可能だ、と多くのロシア人は思う。ロシア語の響きなしに『オネーギン』の良さがわかるはずがない。外国語に訳したものは、音がまったく異なり、意味すら十分に伝わるかどうか疑問である。また、諸外国の国語に移しかえられた『オネーギン』はその国語の文化的背景に影響されて、ロシア語の『オネーギン』とは別の文化のバイアスがかかる、まして、国語の文化的歴史的背景をもたないエスペラント語への翻訳なんて、問題外である、と。

国語への強い思いが、ときとして外国語や世界語への偏見を生むことがある。確かに音や文体はそのままの形では翻訳困難である。また文化的背景の相違により意味のずれも確かに生ずる。しかしながら、外国語に移された『オネーギン』はそれ独自の美点をもつのである。ロシア語原文にあるものが損なわれる場合もあるだろうが、原文だけでは味わうことのできない多様な価値や深い意味を翻訳が伝えることもある。翻訳と原文の比較対象は「意味」については可能だし必要であるが、形式美、すなわち音や文体については別個の独立した価値をそれぞれが有する。東アジアで漢訳仏典が読経される現象、各国の国語訳聖書が尊重される現象、こういったことは翻訳に独自の価値があることを裏付ける。

では国の文化的伝統と無縁であると思われているエスペラント語への翻訳はどのような価値があるだろうか？（実は筆者や読者の個性によって読み方はさまざまなのである）

原文の意味は既存の国語訳より忠実に伝えられる。外国人による翻訳よりも、自国人によって世界語に翻訳されることが多く、そのために作品の理解度が比較的深いからである。問題は形式である。散文形式の作品では意味の伝達に重きがあるので比較的問題は少ないが、詩形式の作品は原文の形式を完全に翻訳することなど不可能に決まっている。しかし、読んで美しいかどうか、という視点で見れば、エスペラント語能力の高い、かつ詩的才能に恵まれた翻訳者の手にかかれば、読後の満足度は諸国語にひけをとらない。韻もリズムも美しいエスペラント語として生まれてかわってくる。翻訳にはそれ固有の生命が宿る。また見事な文に出会うと原文自体への興味も湧いて来る。

『オネーギン』のこのエスペラント語訳では、原書では意味の伝達が困難な部分、それも本質的な部分が簡潔な表現で伝えられている。そんなことがあるものか、と疑問に思う人、怒りさえおぼえる人がいるかもしれない。その点について、私の読後感と見解をここで少しばかり提示しておきたい。

このエスペラント語訳『オネーギン』ではロシア語での公式出版で省かれた部分がかなり補われている。さまざまな理由で下書きとして残り、本出版で削除された章、詩、部分、

また雑誌などに断片として発表されて本には掲載されなかった部分、などがエスペラント語に翻訳されて付加されている。たとえば、『オネーギンの旅』、第１０篇デカブリストに関する草稿、第七編で『オネーギンのアルバム』などの重要な詩がエス訳されているのみならず、各編で省略された多くの章が補完されている。これはロシア語での全集には注などで公表されてはいるものの、翻訳や単行本ではあまりお目にかかれない部分である。このエスペラント語訳で読むならば、創作過程を含む『オネーギン』の全体像が一冊の本で今まで以上に把握できる。ロシア語が苦手な人で『オネーギン』を読みたい人にはこの訳本が貴重である。有名なナボコフ（『ロリータ』の作者）による英訳ではかなり補完されているが、日本語の訳本では中々ここまでされてはいない。

さらに、エスペラントの韻文として、この訳本は優れたお手本の一つとなるであろう。ぜひ多くの人々にエスペラント詩の美しさをこの『オネーギン』で味わってほしい。しかし、このような形式の美のみならず、意味を伝えることにおいても、エスペラント語訳者メーリニコフ氏の功績は大である。

プーシキン自身による『オネーギン』の書き出しはフランス語である。この箇所は気づきにくいが、極めて本質的な部分である。

Pétri de vanité il avait encore plu de cette espèce d'orgueil qui fait avouer avec la même indifférence les bonnes comme les mauvaises actions, suite d'un sentiment de supériorité, peut-être imaginaire.

ロシア人注釈者がロシア語に訳す場合にはおおむね次のようになっている。

Проникнутый тщеславием, он обладал еще той особенной гордостью, которая побуждает признаваться с одинаковым равнодушием как в своих добрых, так и дурных поступках, - следствие чувства превосходства.

日本語訳では「彼は虚栄心に充ち満ちて、あまつさえ、なすことの善悪にかかわりなく、おしなべて平然とうち明けてしまうほどの傲慢さをもっていた。おそらく、それは想像的な優越感によるものであろう」（中山省三郎訳）となっている。一読では何のことやらよく分からないだろうが、それは「虚栄心」という言葉に訳された原文の部分があまりに多義的かつ深い意味をもつからである。メーリニコフ氏のエスペラント語訳では次のように表現されている。

Saturita de vanto, li havis ankoraŭ certan specon de orgojlo, kiu devigas konfesi kun sama indiferenco kaj siajn bonajn, kaj siajn malbonajn agojn, sekve de sento pri supereco, eble imagata.

ポイントは原文の vanité をロシア語では тщеславие(虚栄)、エスペラント語では vanto とした所である。仏語は「虚栄」、「空虚」、「空」、「つまらぬこと」などという意味がある。聖書の「伝道の書」では Vanité des vanités「空の空」とある。『オネーギン』という作品はこの「伝道の書」と深い共通点がある。この世の様々な「空」をうたっている。その意味で仏教的諦観とも重なる。「虚栄」という訳ではその肝腎の点が十分に伝わらない。仏語

の現代語の意味にとらわれると「虚栄」という訳で満足してしまう。現代フランス語に慣れた人ほど、この「虚栄」という意味を真っ先に思い浮かべ、哲学的・宗教的な「空」という意味を忘れがちなのである。

またロシア語訳の「伝道の書」ではその部分は Суета сует（スエタ・スエット）と訳されている。суета（スエタ）は現代ロシア語では「浮世の気苦労」、「せわしなさ」がすぐに思い浮かぶ意味であり、「空」の意味は薄れている。もともとはサンスクリットの「シュニャータ」（空）と同一起源であった。聖書の同じ箇所でも、仏語と露語では受け取る印象が大きく違ってくる。各国で単語の意味が歴史過程において変化してしまっているからである。

ところがエスペラント語の vanto なら同じラテン語起源の vanitas vanitatum をほぼそのまま移し替えられる。また後述するように、『オネーギン』ではロシア語のスエタも vanto と訳されるのである。ちなみに、ザメンホフ訳伝道の書では　vantaĵo de vantaĵoj となっている。語根は同じである。この vanto、さらにそれと同根の語がどのような文の中で使用されたか検証してみよう。

Ne ! Sentoj liaj jam malvarmis,　いな！彼の感性ははや冷却し、
lin tedis la monduma bru’；　　社交界の喧騒は彼をうんざりさせた；
kaj belulinoj vane ĉarmis,　　美女達の魅力も虚しく、Красавицы не долго были
ne logis liajn pensojn plu；　彼の思いを惹かなくなった。Предмет его привычных дум
(I:37)

ロシア語原文にはない vane を使い、全体の文章の意味をより鮮明にしている。

Kaj dume – ĝuu, ho vivanto,　しばし、楽しめ、生きている者よ、Покамест упивайтесь ею,
facilan vivon sen rutin’!この易しき人生を因習に捕われず! Сей легкой жизнию, друзья!
Konscias mi pri ĝia vanto,　その「空」を我は知り　Ее ничтожность разумею
kaj ĝi apenaŭ ligas min;　それに私は執着しない。И мало к ней привязан я
(II:39)

ロシア語では「無」ничтожность となっている部分を vanto「空」とエス訳してある。「因習にかまわず」の部分は原文にはない。「伝道の書」にある「空」であるからこそ今与えられた人生を楽しめ、という思想がここに引き継がれている。

Amikoj, ve ! Alternas jaroj – 友達よ、ああ！　年月はうつり替わり、
kun ili, unu post ali’,　それとともに、次々に
alternas vante la modaroj　流行も空しく替わる
en bunta, plej bizara stri’.　色とりどりの、風変わりな模様で。
Ŝanĝiĝas ĉio en naturo;　自然の中で万物が変化する。
(III:10a)

この部分は原文で省略され、エス訳で補完された。無常感あふれる文である。

Amikoj, ĉio estas vanto!友達よ、一切空なり、Друзья мои, что ж толку в этом?
（III:13）
一切空とエス訳した部分は原文で「はたしてここに、いかなる意味があるものぞ」となっている。訳者がいかに「伝道の書」を意識しているかがこの部分の訳に表れている。
　また女性との恋愛に関して、この vanto という言葉が頻繁に使われている。
Kaj, per kredemo blindigata,信じ易くて盲目にされ И с легковерным ослепленьем
denove la junulin'-amant'またもや女好きは Опять любовник молодой
postkuris ŝin pro ĉarma vant'.魅惑の空虚を求め彼女の後を追う。Бежал за милой суетой
(III:23, p.62)
この際の vanto はロシア語でスエタ、すなわち梵語のシュニャータ＝空、にあたる訳語にされている。原文での、女性の魅力を追い求めることが「空」である、という主張がエス訳によく伝えられている。同じ章（III:23a）の草稿では女の愛嬌に惑わされる「空」が描かれる。
Koketulinoj, senpretende　愛くるしい女たちよ、衒いなしに言う
mi peke amas vin – en vant'　私は貴女方を罪深く愛する－空虚にも
karesojn kun ridet' laŭmende　求めに応じて微笑を浮かべ愛撫を
disipas vi por dezirant': 貴女方は欲しがる男のために振り撒く。
(p.62)
この草稿部分ではコケットな女性からの愛撫そのものが vanto「空」である、とされている。次では(IV :2)女性を憎悪し地獄の力と形容、そんな女性との会話を「空なる」と記す。この部分は公刊された 7 節からの文章に先立つもので、オネーギンの女性観を理解する上で極めて重要な個所である。
Jen mi malamis ŝin subite,　私はすぐに彼女を憎む
tremante, larmis mi sen vort',　震えながら言葉なく涙する、
en ŝi mi vidis timigite　彼女の中におずおずと見る
kreaĵon de l' infera fort'; 地獄の力の創造物を；
rigardo ŝia penetranta, 見透かすような女の目
rideto, voĉ', parolo vanta – 笑い、声、虚しい会話
saturis ĉion ja ĝis plen'　もうたんまりだ
perfid', malico kaj venen';　裏切り、悪意、そして毒
je ĝem' kaj larmoj la bezono　嘆きと涙の必然が
per mia sango nutris sin...　我が血でふくれあがる。
(p.76, 草稿)
Ja ĉio pasis jam sen spur'; すべて跡かたもなく過ぎ去り
kaj ekde tiam gravas nur,　その時から大変なことに

ke mi malvarmas senespere:　私は絶望的に冷却し
por am' fermitas mia kor'.　わが心は愛の扉を閉ざした。
Ĉio vakas. Ĉio pasis for.　一切空、一切が過ぎ去る。
(p.76,　草稿)

『オネーギン』第４編は上記の文が入っている個所が省略されて、いきなり第７節から開始され、有名な一句、「女は我々が愛することが少なければ少ないほど、たやすくひっかかるものである」という文句で始まる。その言葉の前に省略された６つの節では女性との苦い交際経験が vanto「空」として綴られている。エスペラント訳を読むことによってそのことの重要性に気付かされる。ここで描かれたのは、恋愛こそ、世のはかなさをおしえるもの、ままならぬものである、ということである。結局、自分自身のみを愛せ、と。失恋の結果このような結論、つまり自己愛、を重視せよ、ということになる。オネーギンのエゴイズムも不幸な恋愛経験の結果とされている。
En vantaj streboj al fantomo　亡霊を虚しく追っても Призрака суетный искатель,
ne perdu fortojn en serĉem';　探求はやめるな Трудов напрасно не губя,
prefere amu do vin mem,　汝自身を愛するがよい。Любите самого себя,
(IV:22,p.84)
ここでも vanto はスエタの訳として用いられている。
『オネーギン』で「虚栄」が最も強く印象付けられるのはレンスキイとの「決闘」である。決闘は申し込まれたら、世間体から拒否はできない。臆病者とのそしりを世間から受けることを恐れるのである。オネーギンはきわめて投げやりな態度で決闘を受けてたつ。虚栄心のなせるわざである。その虚栄の世界では不思議なことに vanto およびそれに派生する単語が使われない。

Li verajn sentojn montri povus,　素直な気持ちを見せて
sed ne hirtiĝi, kiel best';　野獣のように毛を逆立てるのではなく
li, eble, senarmigi provus　若き心を宥める努力をすべきだった
la junan koron. « Per protest', -　事態の流れに抵抗するには
li pensas, - tempo jam forpasis...　時はすでに失われた、と彼は思う。
Kaj la aferon embarasis　事を荒立てたのが
Zareckij – olda duelist':　ザレツキイなる老決闘家。
malico, klaĉoj kun persist'…　悪意、しつような悪口
Jes, endus malestimo puna　そう、罪を帳消しにする機会は終わった
pro liaj vortoj de provok',　挑発の言葉の罪を
sed flustro, malsaĝula mok'…"　しかし、うわさ、愚かな嘲り
Kaj jen la opini' komuna!　これが世論というもの！

Risorto de honora sent'! 名誉心の弾み！
Por nia mondo fundament!　これが我々の世間の基盤。
(VI:11)

Vanto には、はかない空、空虚、そして虚栄の意味がある。「虚栄」と解釈したら、これはつまらないプライド、名誉心となる。この作品は、その二つの意味を重ね合わせて書かれている。虚栄によって決闘へと誘い込まれ友を殺す悲劇、および余計者型主人公オネーギンの「空」観である。だが「空」に本当に徹底すれば、決闘という虚栄は回避されたはずである。決闘など「空しい」ものであるから。しかし、「世間体」から、つまり「名誉心」から解脱できないオネーギンの弱さがここに現れている。完全なる世捨て人となれない、中途半端な余計者の弱点がこの決闘に露呈している。エスペラント語の訳で極めて優れた部分を次に紹介しよう。「名誉」という言葉はロシア語でチェスチ честь、それは決闘を連想させる言葉でもある。

Kaj due: la poeto-bub' 第二に赤ん坊の詩人には A во-вторых: пускай поэт
stultumi rajtas – ni, sen dub',　愚行の権利、我々は Дурачится; в осьмнадцать лет
pardonu lin.　Eŭgen' racia,彼を許そう。理性的なら Оно простительно. Евгений,
pro korfavor' al la junul',エヴゲーニイは青年への好意ゆえに Всем сердцем юношу любя,
sin devus montri en skrupul' –慎み深く自分を示すため Был должен оказать себя
ne pilk' en kliŝa lud' social, 世間常識の玩具ではなく Не мячиком предрассуждений
ne knabo, arda en kuraĝ', がきのから勇気でもなく Не пылким мальчиком, бойцом,
sed viro kun honest' kaj saĝ.正直で知恵ある男として。Но мужем с честью и с умом.
(VI:10) p.120

年長者は未熟者を許さねばならない。レンスキイの行為（決闘を申し込むような）を許す、つまり決闘をやめる。これが「正直で知恵ある男」のなすべき行動である。この部分、ロシア語では「チェスチと知恵を備えた男として」となっている。しかし、「チェスチ честь」を「名誉」と訳したならば、プライドを守るため決闘におもむく、ということになる。なぜなら、決闘こそ名誉心の最たる表現であったから。それをエスペラント語ではメーリニコフ氏は「正直」honesto と訳している。これは決闘を避けるような反省をしている場面での訳として、非常に深い考察の成果であろう。
ロシア語でチェスチとは「高く評価されうる社会的道徳的状態、尊厳、価値」（достоинство, высоко ценимое общественно-моральное состояние）であるから、「名誉」という一語に限られない。だが、ナボコフも名誉と訳す。
no bandyball of prejudices,
no fiery boy, no scrapper,
but a man of honor and sense. (Nabokov, 232)

この部分はエスペラント語訳の質の高さを証拠立てる個所として評価されてよい。空虚なプライド、名誉心、つまり虚栄心の表れとしての決闘、それを後悔しているオネーギンの姿を表現する個所に「名誉」は相応しくないのである。ただ、決闘の場面に vanto という言葉が直接に用いられていないことも、注目に値する。決闘場面全体が vanto「空虚」であるから、あえてその言葉は必要ないのであろうか。

ロシア語原本から削除された「オネーギンのアルバム」という草稿では社交界の「空虚」について vanto が多用される。(VII:21 a, pp.145-148　Albumo de Onegin)

Malamas oni min kaj klaĉas, 私は嫌われ罵られ
la viroj ne toleras min,　男達は私を容赦せず、
fraŭlinoj antaŭ mi tremaĉas　乙女らは私の前で首をすくめ
kaj strabas ĉiu sinjorin'.　淑女はみな横目で見る。
Sed kial do? Ĉar babilanton　だが何故？　おしゃべりな奴を
ni ĝojas laŭdi pro afer',　みな称えるから、
ĉar vanta hom' preferas vanton, 空虚な者は空虚を好むから、
(p.145)

「オネーギンのアルバム」では社交界の空虚が記される。タチヤーナもまた上流階級の社交界が vanta mondo (p.159)であると感じている。プーシキン自身も社交界の泥沼の中で殺された。「つまらぬ気苦労」、つまりスエタとしての vanto が社交界につきものであることを、自分の文学作品の中では書きながら、自らは妻の浮気の噂に空しく抵抗して決闘で死ぬ。

『オネーギン』に伝道の書の影響が濃いことはすでに指摘したが、「すべてのわざには時がある」という思想は次のような詩句にも表現されている。

Beatas, kiu estis juna, 幸福者とは若い時若かった者 Блажен, кто смолоду был молод,
kaj kreskis al matura aĝ', 成熟の歳に成長した者 Блажен, кто вовремя созрел,
se fridon de la vivo nuna 今の人生の冷たさを Кто постепенно жизни холод
toleris li kun plena saĝ'; 十分な知恵で赦した者 С летами вытерпеть умел
<...>
Sed triste pensas ni, ke vante 悲しきかな、空虚に Но грустно думать, что напрасно
juneco nia pasis for,　青春が過ぎ去ったと、思い Была нам молодость дана,
ke ni perfidis ĝin konstante,青春にいつも背いたと思い Что изменяли ей всечасно,
ke ĝi nin trompis sen honor';青春が我々をぶざまにあざむき Что обманула нас она
ke la plej bonaj kordeziroj,最良の心の願いや Что наши лучшие желанья,
ke freŝaj revoj kaj aspiroj 初々しい夢や望みが Что наши свежие мечтанья
rapide putris jam por ni,我々にとってたちまち朽ち Истлели быстрой чередой,

samkiel en aŭtun' foli'. 秋の葉の如く果てる、と思えば Как листья осенью гнилой.
(p.182-183)

　最後の章でオネーギンが再びタチヤーナの夜会へ出席していく有様を描写するとき、vanto が使われている。
Ho, kia stranga halucin'!何たる幻覚！Что с ним? в каком он странном сне!
Moviĝis kio en la sin'　胸中何かがうごめく Что шевельнулось в глубине
de la animo pigra, frida?怠惰で冷たい魂の胸の内で Души холодной и ленивой?
Ĉagreno? vant'? aŭ eble jam 憂愁？気苦労？又たぶん Досада? суетность? иль вновь
denove juna zorgo – am'? 再び青年の心労－恋？Забота юности – любовь?
p.187
この詩句で vanto はロシア語スエタの派生語 суетность の訳になっている。細々した気苦労を「虚しいこと」という意味を含む言葉にあてている。今で言う「ストーカー」のようにオネーギンはタチヤーナにつきまとい、手紙攻勢をかける。その時タチヤーナに自分の人生が空虚に過ぎたことをオネーギンは懺悔する。空虚な過去への反省から、夫ある身のタチヤーナへの目前の愛にオネーギンは全身全霊をかける。手紙の中でその気持ちをせつせつと綴る。
Liber', trankvilo – kredis mi – 自由、平穏、これこそ Я думал: вольность и покой
feliĉon anstataŭos. Di'!幸福に優る、と私は信じた、神よ Замена счастью. Боже мой!
Eraro, puno kiom prema…何たる誤り、何たる罰当り Как я ошибся, как наказан.
Ne, vidi vin en ĉiu hor',毎時貴女を見て、Нет, помунутно видеть вас,
post vi konstante ĉie iri,後をどこまでも行く、Повсюду следовать за вами,
<...> ... jen beato!　それこそ至福。　... вот блаженство!
Kaj mi malhavas tion ĉi:私にはそれもない И я лишен того: для вас
sen ŝanc' vin sekvas akompane; 望みなく貴女につきまとう Тащусь повсюду неудачу;
valoras ĉiu hor', sed mi　一刻一刻が高価、だが私は Мне дорог день, мне дорог час:
en splen' disipas tagojn vane, 憂愁の日々を空虚に浪費 А я в напрасной скуке трачу
donitajn laŭ kalkul' de sort'.　運命で与えられた日々を Судьбой отсчитанные дни.
(pp.192-193)
　「伝道の書」ではこの世の一切が空であるが故にこそ、「日の下で神から賜ったあなたの空なる命の間、あなたはその愛する妻と共に楽しく暮らすがよい」（9:9）と教えているが、オネーギンはこれをタチヤーナとの愛で実践しようとした。しかし、人妻であるタチヤーナはオネーギンの希望をしりぞける。
　ドストエフスキイはこれを根無し草の放浪者オネーギンに対するロシア女性タチヤーナの勝利、と称した。ドストエフスキイはスラヴ派的な見地から余計者を西欧派とみなし、ロシアの大地から切り離された根無し草とみなした。また、この『オネーギン』という作

品はそのような思想上の論争に利用され、西欧に害されたオネーギン、ロシアの大地のタチヤーナという図式がずっと常識化していた。しかしながら、書物から省かれた草稿まで読めば、この常識すら再検討の必要がでてくる。エスペラント語訳ではその草稿部分が掲載されているので、ロシア語の全集およびナボコフ英訳（それらには草稿も発表）が読めない者にも参考になる。エスペラント語訳ではオネーギンの旅の章が付加され、その中で主人公が思想的転換をとげ、スラヴ派的心情になってロシア国内の旅をする、と記されている。

Lin tedis famo de Melmoto,　彼はメルモットの名声も飽きてきた、
do li ne portos maskon plu:　それでその仮面をもうかぶらない：
jen li vekiĝis – patrioto　かれは目覚めた－愛国者として
en tag' de pluvo kaj enu'.　雨の日も、退屈な日も、
Sinjoroj, tuj al li Rusio　読者諸君、彼にはロシアが
ekplaĉis tute. Flam-pasio　すっかり好きになりはじめた。情熱の炎が
aperies. Li decidis jam:　現れた。彼はもう心に決めた。
Rusio estas sola am'.　ロシアだけが唯一の愛、だと。
Jam li Eŭropon abomenas　彼はもうヨーロッパを厭う。
(p.165)

『オネーギン』のエスペラント語訳は他に６つある。本稿では他の諸訳と比較対照する余裕は無かった。また多くの諸外国語訳との比較はあまりにも材料が多すぎて不可能である。ここではただメーリニコフ氏のエスペラント語訳の価値を一部紹介したに過ぎない。しかし、氏のエスペラント語訳『エヴゲーニイ・オネーギン』は愛好者および研究者に必読の文献である。これを読むことによって作品の理解度が深まることは間違いない。それどころか、これを読まずに『オネーギン』を語ることはできない、とさえ思う。プーシキン研究にはエスペラント語の習得が必須となる時代が来た。ロシア文学研究にエスペラント語が必要になる時代が来たということだ。もしかしたら、世界の文学研究にエスペラント語の文献が必須となる時代がすでに到来しているのかもしれない。

2008 年 1 月 25 日